英国カメラの代表としての
サンダーソンとソホフレックス

AJCC　2015年7月　研究会報告

会員番号0022　高島鎮雄

はじめに

AJCCは今秋の日本カメラ博物館のイギリス・カメラ展に参加を予定し、準備を進めてきたが、諸般の事情で参加しないことになった。その準備の一環として7月の研究会テーマをイギリス・カメラとし、私が研究発表を行うことになった。

写真術の発展に貢献した英国

今日、写真術の祖とされているのはフランスのルイ・ジャック・マンデ・ダゲールが1839年にフランス科学アカデミーで公表した銀板写真、いわゆる“ダゲレオタイプ”である。しかし同じ年、英国のウィリアム・ヘンリー・フォックス・タルボットも“カロタイプ”と称する方式を完成する。ダゲレオタイプは銀メッキの表面に画像を固定するもので、したがって左右逆像の上、映像は1枚しか得られなかった。これに対しカロタイプは後のネガ・ポジ式の原点とも言えるもので、左右正像のプリントを何枚でも焼き付けできた。

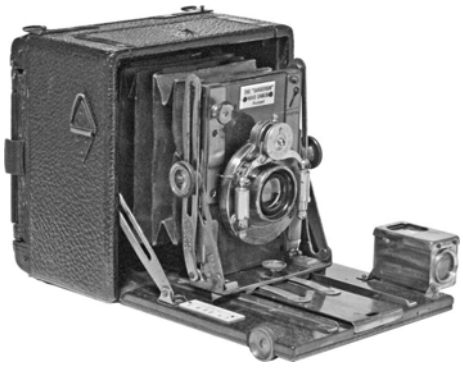
同じ英国のフレデリック・スコット・アーチャーは1851年、ウェット・コロディオン方式、いわゆる湿板写真を完成する。感光乳剤の担体がガラスなので、いっそうクリアなプリントが得られた。湿板までの方式は撮影現場の暗室で感光材料を作り、濡れた状態のまま撮影、その場で現像処理しなければならなかった。この不便を解消したのが、1871年に英国のリチャード・リーチ・マードックが発明したドライプレート、いわゆる乾板である。ガラス乾板は大規模な工業生産が可能で、取枠に装填して複数を携行してロケーション撮影ができ、帰宅後に暗室で現像すればよかった。この簡便さにより、写真は飛躍的に普及を見ることとなった。このように英国は写真の発達と普及に絶大な貢献をしたのである。

カメラに視点を移すと、1839年のジルー・ダゲレオタイプを祖としてまずフランスで作られるが、間もなくドーヴァー海峡を渡った英国でも作られるようになる。英国には昔から家具作りなどの木工芸の技術と伝統があったが、それらが応用されて性能に優れた美しいカメラが数多く手造りされた。19世紀から20世紀への変わりめ頃から、カメラの素材として金属が用いられるようになり、カメラの設計と製造の主流はしだいにドイツへと移っていく。しかしその後も英国では木製、金属製のバラエティに富んだカメラが多種作られ、それは1960年頃まで続いた。英国コダックの126インスタマチックや110などは、さらにその後10年間は生産された。

それらはあまりにも膨大ですべてを語ることは到底不可能なので、ここには英国を代表する2台のカメラを選び、やや詳しく述べてみたい。

サンダーソン・ハンドカメラ

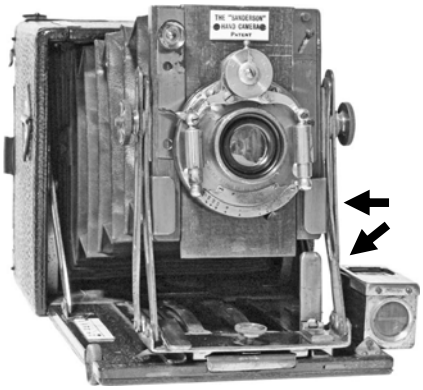
その1はサンダーソン・ハンド・アンド・スタンドカメラである。19世紀末から20世紀始めにかけてのスタンドカメラ(三脚を用いる



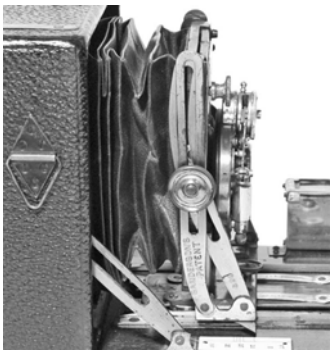
1899/1900年の最初期のサンダーソン・ハンドカメラ。ボディNo. 699。まだ角蛇腹だ。

「ハンドカメラ」と明記した銘板。

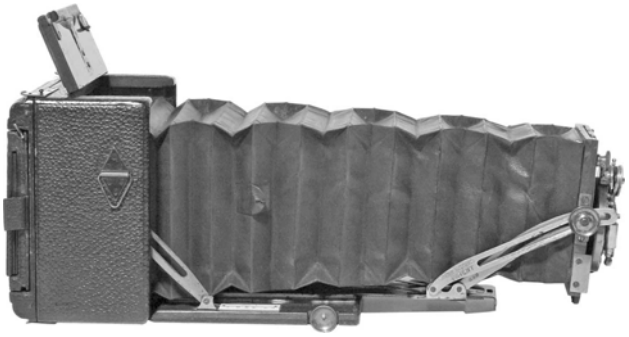
最初期型サンダーソン・ハンドカメラの広告。



レンズボードを垂直に固定するキャッチは
後のモデルと異なるソケット式。

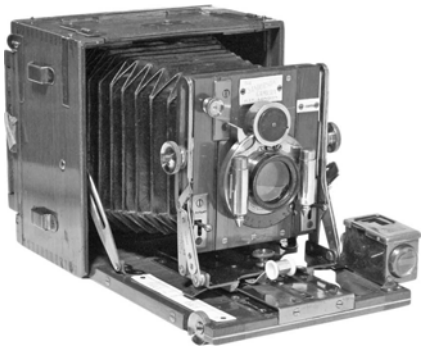


サンダーソン特許の
片側2本ずつの前板保持アーム。



ベースボードを最大に繰り出し、2本のアームを最大に
傾斜させると、レンズは37cmまで伸びる（手札判で）。

レンズのムーブメントは上下、前後に最大限の自由度をもつが、
左右シフトは効かないので、カメラを横にするしかない。



レギュラー・モデルのトロピカル。
C.P.ゲルツのダゴール168mm F6.8レンズとボシュ＆ロム・ユニカム・シャッターをもつ最高級モデルの一つ。

↗すべてのサンダーソンは広角レンズ使用時のためのベッドダウンをもつ。
ボディ内のショートベッドを外から操作できるのは1906年発売のデラックスで、ボディ右側面前下方に小さなキーをもつ。

フィールドカメラ）は、建築物の撮影に多く用いられたので、レンズの上下や前傾、後傾などのシフトをもつのが一般的であった。それらの中でも、最もシフトの方向が多様で、シフト量が大きく、しかもシフトがやり易かったのがサンダーソンであった。シフト抜きにはサンダーソンは語れず、サンダーソンなしにはレンズのディスプレースメントは論じ得ないと言えるほどであった。

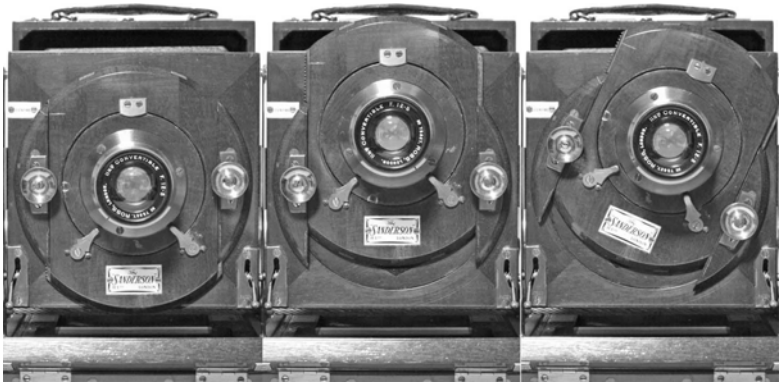
サンダーソンの生みの親はキャビネットメーカーのフレデリック・H・サンダーソン（1856−1929年）であった。1880年台彼は写真に興味を抱き、自ら建築物を撮るようになる。当時のフィールドカメラにはレンズのムーブメントはあったが、不完全で、しかも使い辛かった。そこでサンダーソンは自ら、長いスリットを切った片側2本ずつ、計4本の腕でレンズボードを支え、融通無礙にシフトのできる方式を考案、1895年10月1日に第613号の特許を取得する。それは“ユニバーサル・スウィング・フロント”と名付けられ、初めはフィールド用のスタンドカメラ、“Aパターン”に用いられた。

次いで1899年に完成されたのが、いわゆる“サンダーソン”である。このカメラの銘板に初めてTHE “SANDERSON” HAND CAMERA PATENTの文字が刻まれた。今日では「距離スケールとファインダーを持ち、手持ちで撮れるカメラ」がハンドカメラと定義されているが、もちろん三脚上でも使えるのでハンド・アンド・スタンド・カメラという呼び方が最も正しいようだ。私の手許にある最も古いサンダーソンはボディNo.699で、1899年か1900年製の最初のモデルである。まだ角蛇腹で、レンズボードの垂直を解除する方法も後のようなレバーではなく、ソケット式とも呼ぶべきものだ。

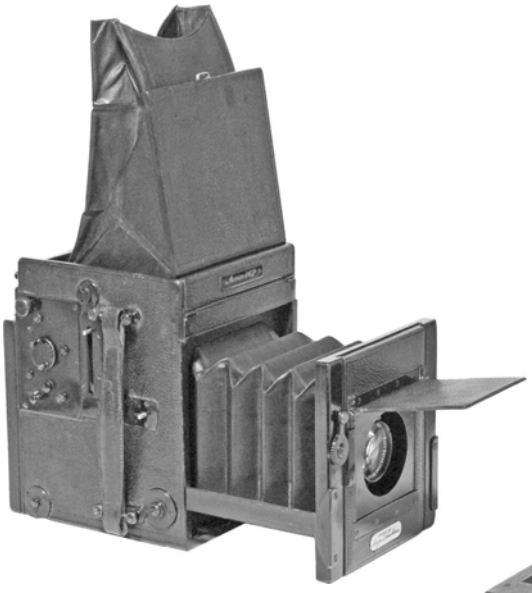
サンダーソンはその後も細部の変更のみで1930年代末まで作られ、一説によると第二次大戦後にも少数が組み立てられたという。モデルはレギュラー、デラックス、ジュニア、ツーリスト、トロピカル、ロールフィルムなど多岐に亘り、サイズも手札判（8×10.5cm）、5×4インチ版（10×13cm）、ポストカード判（9×14cm）などがあった。最も一般的なのは手札判であった。またメーカー自身がリストアップしたレンズとシャッターの組み合わせも非常に多く、それらの順列組み合わせはほとんど無限に近かった。

フレデリック・H・サンダーソンが開発、特許をもつサンダーソン・カメラだが、当初から販売は全面的にホートン（発売時はGeorge

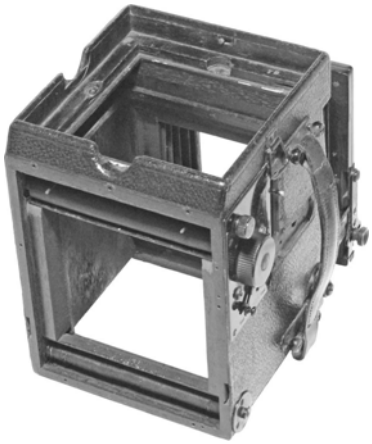
スタンド専用のフィールドカメラ。サンダーソン“Aパターン”。
これは1920年代中頃の5×4インチ判の豪華トロピカル・モデル。



“Aパターン”のターンテーブルを利用したユニークな回転式レンズシフト。
これも最初の特許に含まれていたとされる。



2段伸ばしのソホフレックス。緑革の手札判。
ハンサムな英国紳士と言ったところだ。



ミラーボックスを抜いた8×10.5cm判
ソホフレックスのスケルトン

左側面から見たミラーボックス。ミラーが上昇中のポジションで、ミラーがピボットされる枠が後傾しているのがわかる。矢印はミラーショックを吸収するエアダンパー。

カーショー特許の後退しながら上昇するミラー。（左）ファインダーポジションで、ミラーと下から上がってきたパネルとで暗箱を作る。（中）後退しながらミラーが上がるところ。（右）露光中および露光後。

Houghton and Sons）に委嘱された。実際に製造したのはホームズ・ブラザーズ（Holmes Brothers）だが、同社は1904年にホートンズ（この年Houghtons Ltd.になった）の傘下に入った。

ソホフレックス

サンダーソンと並んでビンテージ期の英国を代表するカメラが木製のフォーカルプレーンシャッター一眼レフのソホフレックスである。ソホフレックスの名は発売元のマリオン社がロンドンのウェストエンド、シティ・オブ・ウェストミンスターの一角Soho（正しい発音はソーホー）にあったことに由来する。ソーホーはレストランや映画館、性風俗店などが密集した歓楽街として有名であった。しかしソホフレックスを作ったのはマリオンではなく、ヨークシャー州リーズのカーショー社であった。1888年にエイブラム・カーショーが創業した時には電気や科学機器のメーカーであった。しかし20世紀に入るとカメラ産業に進出、フィールドカメラやスタジオカメラ、それらのアクセサリーの製造を始める。

そして、エイブラム・カーショー自らが特許を取ったミラー装置とフォーカルプレーンシャッターを製品化すべく1904年に完成したのが、即ちソホフレックスである。カーショーはソホフレックスと同じものをベック、ダルメヤー、ロンドン・ステレオスコピック、ロス、ワトソンにも供給し、自らもカーショー・パテント・レフレックスの名で販売した。しかし圧倒的に数量が多かったのはマリオンのソホフレックスであった。1910年にはマリオンはカーショーの総資産の47％を掌握、この関係から1921年にAPM社（Amalgamated Photographic Manufacturer Ltd.）が設立される。APMには感材メーカーを含む他の5社も参画したが、中核はマリオンとカーショーであった。ソホフレックスの発売元は1920年まではマリオン、1921-29年がAPM、その後はソホとなった。

ソホフレックスは大西洋を渡ったアメリカのグラフレックスと幾つかの共通点をもつ。その1はいずれも広範囲に亘って使用され、特にプレスカメラとして重用されたことだ。その2は基本を変えることなく長命であったことで、グラフレックスが1901年から1963年まで存続したのに対し、ソホフレックスも1904年から第二次大戦直後まで続いた。その3は機能上ミラーをセットするとその後方が暗箱になり、ノンキャッピングのフォーカルプレーンシャッターを巻き上げられることである。グラフレックスのシャッターは例の“褌”とニックネームされる長い幕に開いた大小4つのスリットと6段階

手札判とポストカード判のソホフレックス。手札判はレボルビングバックをもつが、横に長いポストカード判はストレートバックだ。

左から大名刺判、手札判、5×4インチ判のソホフレックス。
この上にさらにキャビネ判があった。

のスプリングテンションで24速を選べる。ソホフレックスはスリット幅を変えるいわゆる可変スリットで、通常の手札判では1/16秒から1/800秒まで7段階に変速する。グラフレックスにはミラーをセットしないとシャッター幕が巻き上げられない安全装置がある(外部に露出しているので、目視できる)。ソホにはこの安全装置がないので、必ずミラーをセットしてから巻き上げないと乾板を1枚失う(これは通常の乾板用一眼レフには共通で、だいたい乾板カメラではレリーズの寸前まで引き蓋を抜かないのが鉄則だった)。

カーショーの特許の中でも最も特筆されるのは、下降(セット)時、上昇(レリーズ)時ともに、ミラーが途中で後退することで、これにより一眼レフが苦手とする短焦点の広角レンズの使用が可能になる。これは巧みなリンケージによるところで、このリンケージの一部はエアダンパーに繋がれており、いわゆるミラーショックを吸収する。音もなくしっくりと上がるミラーはソホフレックスの美点の一つである。レリーズレバーを引くとまずミラーが上がり、さらに引くとシャッターが上から下へ走る。しかしソホの場合はミラーとシャッターの間にインターアクションがなく、性急にレリーズを引くとミラーが上がり切る前にシャッター幕が走ってしまい、シンクロのタイミングが合わないフォーカルプレーンシャッターによる写真みたいになってしまう。ミラーとシャッターの間に僅かなひと呼吸が必要で、これはソホの弱点と言える。

私が所有するきわめてユニークなディスプレースメント付きのソホフレックス。ノブを押し込むと片側のピニオンがラックから外れ、そのまま回すと外側のラックだけが繰り出されてご覧のようになる(逆向きにもなる)。ラックレールが湾曲しているのがわかる。

ソホフレックスと言えば最も一般的なのはレボルビングバックをもつ手札判(8×10.5cm)だが、1906年にはストレートバックのポストカード判(9×14cm)も生まれ、その横長を2分したステレオもあった。このほかに5×4インチ(英国では4×5を逆に表記することが多い、10×13cm)、1/2プレート(12×16.5cm)などがあり、さらに横型ストレートバックのデインティ(6.5×9cm、1910年)と日本式に言うアトム判(4.5×6cm)のベイビー(1926年)という小型もあった。デインティとベイビーはカーショー特許のミラーやシャッターは備えていなかった。ソホには別に6.5×9cm、9×12cm、10×15cm、12×16.5cmなど大陸サイズのモデルもラインアップされていた。

通常のソホフレックスはマホガニーに黒のモロッコ革張りだが、私の手許には緑革のものがある。この他にチーク材にニス塗りのトロピカルがあり、通常蛇腹やフードは赤である。レンズはさまざまな英国製が装着できたが、私の経験から言えば、カール・ツァイス・イエナのテッサーが最も多く、次いでロス・ロンドンのXプレスF4.5が多いようだ。